『フォーラム接点』実践報告 ①

邑知地区まちづくり推進協議会との連携の在り方の模索

羽咋市立邑知公民館

羽咋市立邑知公民館

はじめに

私たち邑知公民館の本年度の取り組みは、三本の柱からなる。ここでは、柱の一つである「邑知地区まちづくり推進協議会との連携の在り方の模索」について述べる。

一．まちづくり推進協議会の歴史と組織

この会は、「住民意識の高揚」と「住民同士が互いに支え合う」ことを目的として、平成十五年五月に準備会が発足。また、平成十七年二月に創立総会が開かれた。そこでは多くの人材が集まり、多くのエネルギーで発足し、地区町会長会と公民館が車の両輪のように連携、リードをし、今日に至っている。

この会の組織は、「ふるさと探訪部会」「ふるさと環境部会」「ふるさと学習部会」の三部会で構成され、約六十名の会員からなる。また、部会の上には、会長、副会長、理事や事務局がある。実際の主たる運営は、各部の部長と副部長の協力でなされている。運営費は、会員一人一人の会費で運営され、独立した組織と言える。

二．活動内容

三部会の活動内容については、各部会の主たる活動について述べる。

まず、ふるさと探訪部会である。この部会の目玉は、邑知歴史道「瑩山と白ぎつねの道」という健康ウォークである。目的は当然、邑知の歴史を体感してほしい、健康づくりという願いで位置づけられている。

この歴史道は、白瀬町の豊財院から瑩山和尚が白ぎつねに導かれ開かれたという伝説がある、酒井町の永光寺までの約五kmの山道である。この道の途中には、史跡が点在し、七尾の城山（畠山氏）の出城のあった鉢伏山や上杉謙信が七尾攻めをした際に焼失したとされている泉福寺跡などがある。また、ウォーキング後、邑知地区食生活改善推進協議会メンバーが作る豚汁等を食している。

この活動をするにあたり歴史道の整備は欠かせない、これも部員にとっては大変な労作である。特に今年は、大風の影響もあり、杉の大木が何本も倒れ、探訪部員二十名が山道の草刈りや整備に追われ大変であった。また、猪、クマ、蜂やマムシ対策も心配の一つである。

次にふるさと環境部会である。この部会の目玉は、「ホタルの保護活動にかかるパトロール」である。この行事の目的は、ホタル観賞や生息域調査などを行い、環境保全だけでなく、ホタルの生態を学ぶきっかけづくりや体験である。また、その学びや体験を通し世代間交流を願って位置づけられている。

また、パトロール期間は、ホタルの観賞に適した六月上旬から十日間、一日三人の当番制で実施している。当番の役割としては、車両の進入規制、観賞者の安全対策、ホタル保護や生育などの説明、観賞者数の把握等である。この行事をするにあたっても、ホタルに影響のない、年二回の草刈り等の整備事業は必要である。また、今年

は川沿いに足元を照らすＬＥＤライトを設置し、観賞者の安全を図った。しかもそれは幻想的な情景をかもし出した。

三つ目は、ふるさと学習部会である。ここでの目玉は、「邑知検定」である。この部会の目的は、当然ながら多くの方に邑知を知ってほしい、ふるさと愛を育んでほしいという願いから位置づけられている。この検定は、一般の部（中学生を含む）とジュニアの部（小学四～六年生）がある。検定問題は、部員が新しく作った問題や過去問の中から出題し、受検者には事前にドリル百問を渡し、その中から八十％の問題を検定に出題した。多くの人が挑戦してくれることを願って作成された。

この検定問題の五十問を作成するにあたっても、新しい問題をどうするのか、過去の問からどの問題を選ぶのか、領域ごとに四部会に分かれて作成しているが時間がかかる作業である。また、受検者全員に学習用ドリル集を配布するなど担当主事の事務量も大変な労作であることも特記しておきたい。

邑知公民館は、この三つの部会活動により、令和二年十月二十八日、県の教育委員会より優良公民館表彰を受けることとなった。

三．現状と対策

ふるさと探訪部会の現状であるが、平成二十年代は八十名以上の参加者があったが令和になってからは、三十名程に落ち込んでいる。

原因としては、邑知地区の人口減少もあるが、事業がマンネリ化し新鮮味に欠ける。また、参加者の主体である、小学生の保護者、若い人のニーズに山道五㎞が合わない面があると思われる。

対策としては、まず部員への働きかけ、会員へ参加を呼びかける。広報誌を作成し、邑知地区全戸に配布するなどがある。特に力を入れたのが小学校の学年ＰＴＡ行事に位置付けられるように館長が小学校へ赴き、四～六年生の子供たちに歴史の楽しさを説明し、参加を呼び掛ける事である。今年度は参加者全員に神子原米のおにぎりと泉福寺の御朱印を配布することで参加人数の回復を願った。この取り組みのおかげもあり、約五十名の参加者を得ることができた。しかも、天気に恵まれ、参加者の皆さんに喜んでもらえたことで、今後の見通しができ、主催者側の自信につながった。

ふるさと環境部会の現状と対策である。今年は、環境が良かったのかホタルが多く出た。十日間のホタルパトロール期間には、邑知地区の人々や地区外から約六百人の観賞者があった。子供達の「ホタルが出た」「ホタルが手に止まった」などの歓声、夕涼みがてらに散策、あちらこちらから楽しげな会話が聞こえてくる。ホタル観賞の十日間は良い行事になったと喜んでいる。

対策としては、今年行ったＬＥＤライトの設置等、観賞者に喜んでもらえる工夫を考えていきたい。

ふるさと学習部会の現状と対策である。邑知検定のジュニアの部、一般の部は、学校の協力もあり、着実に実施され「子供達に邑知を知ってほしい」というねらいは達成された。先日、中学校の行事（活動発表会）に参加した時、歴史について発表していたグループがあったのだが、その子供達に鉢伏山と七尾の畠山の関係について質問したが、そこにいる子供達の多くが知っていることからも邑知検定のねらいは達成していると言える。しかし、邑知検定の一般の参加は、平成の時は二十名以上の参加があったが、平成三十年以降には参加者の減少が見られる。

対策として、小中学校については、学校と連携し、今まで通り進めていきたいと考える。また、学校のＩＴＣ化に合わせ、事前学習問題や参考資料などをＰＣやタブレットを使い手軽に取り組めるようにデジタル化した。これにより、ペーパーレス化はもちろん、家族で気軽に邑知検定に取り組んでもらう足掛かりとなった。問題は、一般の参加者である。やはり、邑知の皆さんに知ってもらうことが一番と考え、例題を入れた広報誌を全戸配布した。その上で声掛けをし、参加を募ることにした。そのおかげもあり、今年の一般参加者は二十名を数え、少し努力が報われたと思う。しかし、声掛けは、根本的な解決につながらない。どうしたら一般の方に参加してもらえるか関係者と話し合い工夫を重ねたい。

四．まとめ

私達は、邑知地区まちづくり推進協議会の十五年続いたこの活動は、邑知の宝と考えている。また、この活動を今後も継続し、ますます発展させたいと考えている。そのためには、公民館と町会長会、そして各部会の部長等との連携を密にしていかなければならない。言葉で「密に」というのは簡単であるが、やはり人と人との関係をつくること、公民館を助けてやろうという環境づくり、人づくりが大切と思う。これからも多くの人の助けに感謝しながら、公民館の運営をしていきたいと考えている。